慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Central Labour College, 1909年-1929年(上) : イギリスにおける労働者コレッジ運動と労働組合
Sub Title	Central Labour College, 1909-1929
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.1 (1989. 4) ,p.37- 54
JaLC DOI	10.14991/001.19890401-0037
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890401-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」82巻1号（1989年4月）

Central Labour College, 1909年—1929年（上）

——イギリスにおける労働者コレッジ運動と労働組合——

松　村　高　夫

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　ラスキン・コレッジ（R.C.）の学生ストライキ
　1　R.C. の教育方針と「プレブス・リーグ」の結成
　2　D.ハードの辞任と学生ストライキ
Ⅲ　セントラル・レイバー・コレッジ（C.L.C.）の設立
　1　C.L.C. の開校
　2　労働組合の視点からの C.L.C.
（続）

Ⅰ　はじめに

「オックスフォード，及びケンブリッヂ大学は共に英国上流社会の子弟を教育し，英国の社会は是等の出身者等によりて支配されたかの如き感ある程にて，両大学は特権階級の巣窟である。」

これは，1925年の日本からの視察報告書「英国に於ける成人教育の概況」[(1)]の冒頭の文章である。報告は，つづけて，つぎのように書いている。

「英国の労働階級の子弟は大抵十五歳にして公立小学校を了へるが，公立小学校の児童にして進んで中等学校に入学するものは其の五%に過ぎない。故に其の教育は中途半端にして其の教育の程度は諸外国に比して低きに過ぎたり。まだしも貧民児童は国家の権力によりて小学教育を受けをれど，上流の子弟に至りては現在に於いて小学教育さへも受けざるものあり，家庭に於いて教育を施すを寧ろ両親は誇としてゐる。

大学に到りては Too much education なりと称して国民の高等教育を受くる機会を出来る限り制限したので，遂に特権階級の専有物となって失ったのである。」

さらに，大学で教育を受ける機会の少なかった労働者階級が，自らの教育機関を創設した事情を，つぎのように書いている。

「されば新興労働階級が，自分等の研学機関のなきことを知り，是れを切望する様になりたるは当然にしてこれが成人教育をして勃興せしめたる所以である。

注（1）　協調会教務課「英国に於ける成人教育の概況（1925年山田やす子女史視察報告）」『労働省教育調査資料』No. 5，1926年（？）全文23頁のガリ版刷。

大学拡張講座，及び労働大学にして，一年コース及び三年コースを終り，若し経費に自由を得るとせば，此等成人教育機関よりオックスフォード，及びケンブリッヂに入学せんとせば許可され，又乗び級をさへ許さるゝ場合あり，されば労働者にあらざる人々に成人教育機関を利用さるゝこともあり。

英国の社会主義者，社会主義政党及び労働組合が成人教育を支持することは熱烈なるものにして是れ又英国の成人教育の発展する理由である。」

そして，「代表的成人教育機関の1924年に於ける情況」として，労働者教育協会 Workers' Educational Association—W. E. A.，労働者教育労働組合委員会 The Workers' Educational Trade Union Committies，労働組合総評議会教育勧告委員会 The Educational Advisory Committee of the Trade Union Congress General Council，全国労働者コレッジ評議会 The National Council of Labour Colleges—N. C. L. C.，スコットランド労働大学 The Scottish Labour College の5つを掲げ，婦人成人教育についても報告している。労働者教育協会については，「W. E. A. は労働階級と密接なる関係を有するものにして500に至る労働組合，個人，学生及び16地方庁教育局と提携してゐる勢力は全国労働者教育協会の名を冠するに相応しいものなり」とし，1924年には「寄宿制夏季学校及び研究学級内に於ける生徒数26,000人余に達し学生は全部労働階級の男女であった。W.E.A.は労働者より信任を受け居るのみならず，労働者の妻及び娘等よりも協会の施設する短期講習及び単科講座に出席するもの1923年には50,000人を超えたのである」と，その規模の大なることを報告している。一方，全国労働者コレッジ評議会（N. C. L. C.）については，「ロンドン労働大学（本稿が対象とするコレッジ—引用者），スコットランド労働大学及びプレブスリーグ等の左翼及び労働組合評議会の左翼の連合によりてなる全国労働者大学評議会の1924年に於ける事業は，夜学698校，学生数16,900人にして教育的集会及び週末学校の開催ありたり」と書かれている。

この協調会の報告書は，『労働者教育調査資料』の一つとして書かれており，1920年代後半の「吾成人教育は未だ幼稚期にあり[(2)]」と認識する日本でイギリスの労働者教育が注目されていたことを示すものであるが，同じ『調査資料』のなかの「『ラスキンカレッヂ』概要」[(3)]は，より詳しくラスキン・コレッジの沿革，目的，管理，事業を記している。

「本大学は男女成人労働者に対して，一の学派又は一の党派的因習による見解に拘束せらるゝこ

注（2） 上記報告書の「結論」の部分は，つぎのように記している。

「日本に於ける成人教育は1920年に沢柳，小西の両博士が欧米教育視察の結果高調されたるより問題の存在を顕著ならしめたるものにして，1923年より文部当局に於ける斯業の運動となり，1925年文部省によりて成人教育指導者の養成を目的とする講習会の開催あり，1926年には文部当局は成人教育のために其の費額20万円を計上したのである。私設団体によりて施設さるゝ成人教育も此の頃より盛となり約20ヶ所の都市に私立成人学校が設置された。此の中著名なる労働学校に至りても其の創立は1920年—23年頃のものにして吾成人教育は未だ幼稚期にあり，されば，今後一層，量と質との充実及び組織体系の必要を痛感するものである。」

（3） 協調会教務課「『ラスキンカレッヂ』概要」，『労働者教育調査資料』No. 11，1926年（？）全文17頁のガリ版刷。((1)と(3)の『調査資料』は加藤佑治専修大学教授のご厚意により借用したものである。記して謝意を表したい。)

となく，広く民主的労働階級運動に価値ある社会科学の教育，特に最も適当なる労働運動従事者を養成せんがための教育を施すを目的とする寄宿制大学である。従て重きを労働運動の方面に置くは勿論なれ共，其の与ふる教育の範囲は，経済学，政治学関係の諸学科の外，広く歴史，文学，心理学の如き諸科目をも加へて，可成広汎なる識見の養成に努め，以て同僚労働者を援助し，且労働組合，労働党，消費組合，労働者の倶楽部及其他の諸団体等の各方面に於ける労働運動に役立つべき充分の実力ある学生を供給することを期して居る。」

本稿が対象とするセントラル・レイバー・コレッジ Central Labour College（以下，C.L.C. と略す）は，1909年の学生ストライキを契機にラスキン・コレッジ Ruskin College（以下，R.C. と略す）から離脱して創設された。（この事情も上記報告書に記されているが，後述するように，誤りも多い。）R.C. と C.L.C. の研究としては，成人教育史に位置づけた Brian Simon, *Education and the Labour Movement, 1870-1918*, 1965,[4] Chapter IX. や J.P.M. Millar, *The Labour College Movement*, n.d.(1979) が挙げられるが，C.L.C. のみに関していえば，W.W. Craik, *The Central Labour College, 1909-1929*, 1964. が最も詳しくかつ唯一の著書である。著者クレイクは，かつて R.C. の学生であり，C.L.C. 創立の中心メンバーの一人であっただけでなく，C.L.C. のコレッジ長になった人物である。本稿もその著書に多くを負うているが，しかし，1960年代に回顧しつつ執筆された著書は，たとえば，クレイク自身が労働組合からの奨学金を横領したことが判明してコレッジ長を辞職したこと（後述）が書かれていないなど，必ずしも正確とはいい難い部分がある。そのようななかで C.L.C. 史を凝縮して描いたものに，都築忠七論稿「アングロ・マルクス主義の再検討」がある。氏はその中で，ハインドマン指導するところの社会民主連盟 Social Democratic Federation—SDF の伝統は，「共産党のマルクス主義・レーニン主義と区別されるアングロ・マルクス主義のそれであり，その伝統が全国労働カレッジ評議会（National Council of Labour College—N.C.L.C.）の活動を通じて労働運動の内部に影響力を持つ新しい道を見出した[5]」とする著書『H.M. ハインドマンとブリテンの社会主義』*H.M. Hyndman and British Socialism*, 1961 の指摘の延長線上で，N.C.L.C. を頂点とする「イギリスのマルクス主義の特質と限界」を検討した。そして，第一次世界大戦までの C.L.C. の基調をなしたのは「進化論に接木されたマルクス主義であり，そうしたものとしてイギリスの産業組合主義に土着のイデオロギーを提供した[6]」ことを跡づけた。

本稿は，C.L.C. の通史を書くことを目的としてはいない。ただ，従来の研究で不明確であった点，欠落していた点を明らかにすることを目的としているのみである。依拠する資料は，主としてウォーリック大学モダン・レコード・センター所蔵の C.L.C. 関係資料（MSS. 127/LC）である[7]。

注（4） B. サイモン，成田克矢訳『イギリス教育史II，1870年—1920年』，1980年，亜紀書房. として翻訳されているが，本稿での引用はこの訳書によらない。

（5） 都築忠七「アングロ・マルクス主義の再検討」（『一橋論叢』，84巻1号，1980年7月号），p.4.

（6） 同上，p.10.

II　ラスキン・コレッジ（R.C.）の学生ストライキ（1909年）

1.　R.C. の教育方針と「プレブス・リーグ」の結成

R.C.（設立時は，ラスキン・ホールと呼ばれた）は，1899年2月にオックスフォードに設立された。このコレッジはオックスフォード大学とは別の独立した組織であり，職歴のある労働者の教育を目的としていた。設立のさいの財政は，アメリカの慈善家ウォルター・ブルーマン Walter Vrooman に負っており，のちに著名な歴史家になるアメリカ人チャールズ・ビアード Charles Beard の協力を得た。かれらが1902年にコレッジを去って以降は，労働組合や篤志家に財政を依存しながら，1906年までに約50名の学生が居住するようになった。課程は2年間で，主として経済学，社会学，政治学を学ばせたが，1908年頃には，学生の間にはマルクス主義が支配的になった。J.P.M. ミラーによれば，R.C. の学生が戦闘的であったのは，第1に，戦闘的な南ウェールズの炭鉱地帯から来たものが多かったこと，第2に，学生の多くは，社会民主連盟（S.D.F.），社会主義労働党（S.L.P.），独立労働党（I.L.P.）の党員であり社会主義思想を有していたこと，の2つの要因によった。(8)

任命された R.C. のコレッジ長は，デニス・ハード Dennis Hird。かれの専攻は社会学，進化論，論理学であったが，かれこそ後年 R.C. と対立し，離脱して C.L.C. を設立することになる人物である。ハードはオックスフォードを1875年に卒業するとバタルシー区でイギリス国教会の副牧師になり（1887年），そこで「ジョン・バーンズ John Burns が教会の外で社会主義を説いていたときに，かれ（ハード）は教会の内で社会主義を説いていた。」(9) そして，1887年末にイギリス国教会禁酒協会 Church of England Temperance Society の書記になり，1893年には社会民主連盟 S.D.F. に加入している。主教委員会がハードに対して，禁酒協会の書記か社会主義かのいずれか一方の選択を迫ったとき，かれは協会の書記を辞任した。その後，1895年1月，ハードは『社会主義者イエス』*Jesus the Socialist* と題する講演をパンフレットにするが，これは1部1ペニ

注（7）　他に，合同鉄道従業員組合 Amalgamated Society of Railway Servants（以下，A.S.R.S. と略す）の大会議事録，本部執行委員会議事録，組合機関誌 *Railway Review* は，同モダン・レコード・センター所蔵（MSS. 127/AS）のものである。『プレブス・マガジン』*Plebs Magazine* は，Kraus Reprint, 1970. を使用した。

（8）　J.P.M. Millar, *op. cit.*, p. 2. ミラーは，とくに S.L.P. が刊行した廉価版の『共産党宣言』，『史的唯物論』，『賃労働と資本』が，R.C. の学生の思想形成に影響を与えたと指摘し，さらに The Rational Press Association が刊行した進化論に関する，ダーウィンの『種の起源』とD. ハードの『進化論略述』の6ペンスの廉価版も，同様に大きな影響を与えたとしている（pp. 2-3）。また，当時の R.C. の学生について，1908年に R.C. のテューターに任命されたS. ファーニス Sanderson Furniss（のちに R.C. のコレッジ長になる）は，後年回想録 *Memories of Sixty Years*, 1931. のなかで，「かれらは皆じっさい，ある種の社会主義者かもしくは他の種の社会主義者であった。かれらの中には，全国で最も熱狂的で最も革命的な若者の何人かがいた」と書いている（Miller, *ibid.*, p. 3 より引用）。

（9）　*Plebs Magazine*, vol. 1, no. 7, Aug. 1909, p. 153. D. ハードの経歴は，pp. 153-55. に，また，L.F. ウォードの経歴は，pp. 152-53. に詳しく書かれている。

ーで7万部も売れた。同じ年，スウィフト流の風刺『散歩島』*Toddle Island* を，さらに翌96年にはシニカルな小説『2人の妻をもつクリスチャン』*A Christian with Two Wives* を刊行し，ついにかれは国教会からの追放という二度目の受難にあうことになる。この受難を伝えきいた前記ブルーマンが，社会主義を擁護するハードの勇気を称賛し，R.C. コレッジ長に任命したのである。ハードは社会学の講義のテキストに L. F. ウォード Lester F. Ward（1841年生れ，アメリカ社会学学会会長であり，ブラウン大学社会学教授）の著書，とりわけ『動態社会学』*Dynamic Sociology*（1883年）を使用したが，このウォード自身，のちに1909年の C.L.C. の創立式に参加することになる。

ところで，本稿が対象とする C.L.C. は，すでに指摘したように，R.C. の学生ストライキから誕生するが故に，C.L.C. 史を書くには，この学生ストライキから出発しなければならない。何故このストライキが生じたのだろうか。その原因の分析には，オックスフォード大学の中に占めた R.C. の位置をまず確定することが不可欠である。

オックスフォード大学の教授の多数は，R.C. を設立当初から「好ましくない侵入」とみなしてきたが，1906年頃になると，大学から独立した組織である R.C. を大学に吸収・統合しようとする動きが強まった。その動きは，1908年12月に発表された『オックスフォードと労働者階級の教育』*Oxford and Working Class Education* と題される報告書に明白に表現されている。このオックスフォード報告書は，労働者教育協会（W.E.A.）と大学側の代表者たちとから成る合同委員会（1907年に設置）が調査し作成したものであるが，この委員会が解決すべき問題は，労働者階級出身の学生が極端に少ないオックスフォード大学が，すべての階級を入学可能にするにはいかにすべきかという点にあった。報告書は，「労働組合の書記も労働党の議員も，公務員や弁護士と同じように，オックスフォードの教育を必要とする[10]」と指摘している。しかし，問題はそれをいかにして実現するかであった。問題点は，主として2点あった。

第1は，「大学拡張講座は大学教育の代替物であり，その真の機能は大学への準備をさせることにあるべき[11]」とし，R.C. も大学に入る予備過程と位置づけ，大学に統合しようとした点である。しかし，大学が労働者階級を排除しているという見解は，労働者の間でも広まっていた。1908年から R.C. のテューターをつとめたサンダースン・ファーニス Sanderson Furniss は，「オックスフォード大学の教育がブルジョアジーとミドル・クラスのものであるという批判には，多くの真実がある。いずれにせよ，それは『階級』教育であり，いくつかの点で狭隘であり，……私もそうであったのだが，学生は当時労働者階級とかれらの思想についてほとんどまったく無知なままオックスフォードを卒業した[12]」と書いている。当然のことながら，労働者に対する教育が現在の大学のカリキュラムの枠内で実施されることについては，労働者の間の不信は根深かった。このことは，合同

注（10） *Oxford and Working Class Education*, 1908, p. 48; quoted in Brian Simon, *op. cit.*, p. 314; 訳，p. 354.

（11） B. Simon, *ibid.*, p. 314; 訳，p. 353.

（12） Lord Sanderson Furniss, *Memories of Sixty Years, op. cit.*, pp. 107-8; quoted in B. Simon, *ibid.*, p. 316, fn. 1; 訳，500，注（52）.

鉄道従業員組合 Amalgamated Society of Railway Servants（以下，A.S.R.S.と略す）の南ウェールズ・バーリー支部によるつぎのような決議（1907年夏の年次大会）に，よく表わされている。「大学の教科が根本的に変更され，社会諸問題についてより真実な見解が教えられないかぎり，労働者階級にとって大学拡張講座や他の方法によりオックスフォード大学と緊密な関係を促進させることは不得策であり，そして，カリキュラムが労働派指導者たちの訓練に適したものにならないかぎり，労働者学生をかようなコレッジに送ることは推奨できない[13]」と。

オックスフォード報告書の第2の問題点は，教科内容に関するものである。これは驚くべきほど詳細に講義要綱，とくに経済学の要綱について報告されているものであり，「マルクス主義の魅力が強いことを承認し，それとどう協調していくかという助言を与えている[14]。」まず，「記述的経済学」（マーシャルの『産業の経済学』*Economics of Industry* を使用して）と経済史を教えたのち，経済理論に入るべきである。そのさいクラスの多くの学生が社会主義的な考えをもっていたならば，まずマルクスの『資本論』*Capital* の最初の9章か，ハインドマンの『社会主義の経済学』*Economics of Socialism* を読むことから始めるのがよい。この方法を採る教師は，「しかしながら，通常のテキストでは不明瞭であるマルクス批判も，同様に注意深く説明されることに，確信をもたねばならない。」マルクス「批判の最良の直接的主張は，ベーム・バヴェルクの『資本と利子』*Capital and Interest* と同じ著者の『カール・マルクスとその体系の終焉』*Karl Marx and the Close of his System* である[15]。」これにつづいて価値論に入り，マルクスと「正統派経済学者」が異なった方法で把握していることを理解させ，それ以降は，とくにマーシャルの『経済学原理』*Principles of Economics* を中心に「正統派経済学」を学ばせる，としている。この教科内容への「干渉」は，マルクス経済学を一応教えはするが，マルクス批判にも力点をおき，最終的には，マーシャルの経済学を学ばせる方向を指示するものであった[16]。

このような報告書とその線に沿う R.C. の運営理事会とに学生は反発し，両者の対立は鋭くなっていった。学生は，1907年にはハードの「社会学」以外の講義は無視するようになり，自主的にマルクス主義研究グループを組織した。報告書のでる2ヶ月前，1908年10月には，ついにプレブス・リーグ Plebs League が，「ラスキン・コレッジと労働運動の明確なより満足のいく関係をもたらす

注（13） *Oxford and Working Class Education, op. cit.*, pp. 57-58; quoted in B. Simon, *ibid.*, pp. 315-16; 訳 p. 356.

（14） B. Simon, *ibid.*, p. 317. 訳書ではこの引用部分が訳出されていない。

（15） *Oxford and Working Class Education*, p. 65; quoted in B. Simon, *ibid.*, p. 317; 訳, p. 357.

（16） R.C.では，ハードとハッキングを除いて，教員はマルクス主義に敵対的（リース・スミスのように）であったか無知（S.ファーニスのように）であった。ファーニスは後年の前掲回想録のなかで，当時のかれ自身をつぎのように記している。「私はまったく労働組合と協同組合運動に無知であった。私はもっぱら，好都合ではあるがむしろ不合理に『オーソドックスな』視点と呼ばれているものから経済学を学んだ。私は一行もマルクスを読んだことがなかった。私は社会主義著述家についてほとんどまったく知らなかったし，読んだものは私の心に何の印象も与えなかった。私は庭師，御者，猟場番人以外に労働者に話しかけたことはほとんどなかった。」（Lord Sauderson Furniss, *Memories of Sixty Years, op. cit.*, pp. 83-84; quoted in J.P.M. Millar, *ob. cit.*, p. 9.）

こと」を目的として組織された。プレブス・リーグの総書記に任命されたのはジョージ・シムズ George Sims。大工出身のかれは，活動的な労働組合主義者であり，社会民主連盟 S. D. F. に所属していた。かれは，また，R. C. の有能な学生の一人であり，自主的マルクス主義研究クラスを指導していた。1909年2月には，リーグの機関誌『プレブス』*Plebs* が発刊される。創刊号のエディトリアルは，リーグの追求すべき政策について，つぎのように宣言した。

「『プレブス』リーグとその機関誌は，外部から移植された運動ではなく，内部から成長したものである。その起源は，過去と現在のラスキン・コレッジの学生たち，すなわち労働者階級を代表する人々であり，かれらは労働者階級の解放という理想を互いに共有する。この粘土から，プレブスの構造が造形された。ラスキン・コレッジの現実の位置を明らかにすること，その現在の弱点を指摘すること，その可能性を概説すること，——もし明確に価値に基づいて設立されているならば——その労働運動に対する価値を提示すること，労働者階級の教育の積極的関心を鼓舞すること，労働者階級の観点からの教育の特質の宣伝を広げること，かようなことが，この機関誌で追求される政策になろう。[17]」

1909年2月の段階では，まだ R. C. とは別のコレッジを創立する考えはなく，あくまでも R. C. を真の労働者教育機関に改変することをめざしていた。前記エディトリアルは，「我々の最終的目標は，ラスキン・コレッジを労働運動の明確な一翼とすることである。[18]」と述べていたし，その目標達成のためには，1）財政を労働者団体を基盤に確立すること，2）R. C. の運営理事会に多数プレブス・リーグ側の代表を送りこむことの2点が必要であるとしていた。また，南ウェールズの炭鉱労働者でマルクス主義の理論家でもあるノア・アブレット Noah Ablett は，同じく創刊号の「ラスキン・コレッジの労働運動との関係」という論稿のなかで，R. C. がオックスフォード大学に吸収・統合されんとしている危機について，つぎのように警告していた。「ラスキン・コレッジは，危機的状態にある。もし大学によってコレッジが吸収されるならば，労働者階級へのコレッジの利益は零になるだろう。それ故他の方向を探さねばならないだろう。他方で，もし労働者がコレッジをコントロールするならば，労働運動史上に新しい時代の夜明けがくるだろう。労働者教育は，新しい完全な意義をもつだろう。[19]」このように，まだ R. C. をコントロールする可能性に期待を寄せていたのである。しかしながら，ハードが R. C. の辞職を余儀なくされる状況が生じると事態は急変し，R. C. と訣別して新たなコレッジを創設する構想が，現実性を帯びて浮上してくる。

2. D. ハードの辞任と学生ストライキ

1909年の初めには，R. C. の卒業生たちが，プレブス・リーグの支部を南ウェールズや中部・北部イングランドに創っており，これらの支部を基礎にして学習会を開くことも定着しはじめた。こ

注 (17) *Plebs Magazine*, vol. 1, no. 1, Feb. 1909, p. 1.
(18) *Ibid.*, p. 4.
(19) *Ibid.*, p. 7.

のような状況の下で，R.C. の運営理事会は，ハードがプレブス・リーグの活動に関わっているとの疑念から，1909年3月，「学生の間の秩序と規律を保つことに失敗した」[20]との理由で，ハードを罷免した。ハードが，リーグの機関誌『プレブス』の編集長になる準備がなされたことはあったが，R.C. 運営理事会が「教員は誰も，いかなる方法でもリーグとその機関誌とに関連することは許されないと決定した」ので，編集長にはならなかった[21]し，その他プレブス・リーグに直接関連したという事実は見当らない。もっとも，R.C. がハードを辞めさせる試みは，この時が初めてではなかった。すでに2年前の1907年，新カリキュラム作成の過程で，ハードが担当していた社会学，進化論，論理学の3科目を，文学等に変更する試みがリース・スミス Lees Smith によってなされたが，「学生たちは，もしこの提案された変更が実施されたならば，ただちに（R.C. を）去ると宣言したので，それは失敗した」[22]のである。ところが今回はハードの辞任決定が，R.C. の運営理事会によってなされた。理事は1名を除いて全員がその決定に賛成した。その中にはシャクルトン Shackleton，ボウアマン Bowerman，テイラー Taylor の3名の労働者代表も含まれていた。かれらは W.E.A. の支持者であった[23]。

1909年3月12日，ハードと R.C. 運営理事会の間で，辞職にさいし，年 £150の年金と「すばらしい功労章」を与えることで協定ができた[24]。この協定は，R.C. の評議会の承認を得るという条件付きではあったが，R.C. の理事が評議会の大多数を占めていたので，この協定が事実上の最終協定であると把えたハードは，辞任する旨を学生に対し3月26日に公表した（R.C. の評議会が協定を承認したのは3月31日）。翌27日の「歴史的朝に」，学生は R.C. に対しハードの辞職決定の撤回を求めて抗議行動を開始した[25]。52名の学生のうち50名が賛成して，いうところの「ラスキンの学生ストライキ」がはじまったのである。学生は委員会を組織し，すべての講義に欠席し，自主カリキュラムを，「我々はあえていうが，この計画の結果，学生たちは公式の講義（もちろんハード氏を除いて）から最近受けていたよりも多くの利益をひきだすだろう」と高らかに宣言して作成し，それを実施す

注 (20) 'Mr. Hird's Resignation', in *Plebs Magazine,* vol. 1, no. 3, April 1909, p. 60. この記事は急拠 Supplement として挿入されたものである。

なお，前掲日本の協調会の「『ラスキンカレッヂ』概要」は，「斯くして大学当局とプレブス・リーグを組織せる学生との間に一種の軋轢を生じ，其学生は遂に1909年3月に大学書記長に対し，学長デニス・ハードの辞任を要求し，同盟休校の挙に出で，次で是等の学生は，数ケ月の後中央労働大学 Central Labour College をオックスフォード内に設けた（傍点—引用者）」（p. 5.）と報告している。事実は逆であるが，日本からの調査者にとっては，「学長」が学生と共に大学に抵抗することなど考えられなかったのであろう。

(21) *Plebs Magazine,* vol. 1, no. 1, Feb. 1909, p. 2.

(22) *Ibid.,* vol. 1, no. 4, May 1909, p. 77.

(23) *Ibid.,* vol. 1, no. 3, April 1909, p. 60.

(24) この協定は，R.C. が1909年5月7日になって，「ハードはコレッジに有害な効果を与えると予測される言動があった」との理由で，ホゴにする，したがって年金 £ 150は支払わないと通告した。ハードは訴訟をおこし，翌1910年5月4日・5日の両日裁判が開かれ，ハードの勝訴の判決がなされた。学生ストライキ前後の詳しい月日が判明するのは，皮肉にもこの訴訟の結果である。この訴訟については，*Plebs Magazine,* vol. 2, no. 5, June 1910, pp. 106-7.

(25) *Plebs Magazine,* vol. 1, no. 3, April 1909, p. 61.

るために，学識ある学生が講義を行なった。一方，労働組合やその他の労働団体に，「新しい真の労働者コレッジ」を創設するための回状が配布された。

ストライキは10日程続いて，4月6日に終った。R.C. 当局は，ただちに事態の鎮静化を狙って2週間コレッジを閉鎖する措置をとった。[26] かような「ロック・アウト」の期間に，学生はプレブス・リーグの組織と機関誌を使って新しい労働者コレッジの設立キャムペーンを行なったので，事態は鎮静化とは逆の方向に向かった。R.C. のリース・スミスは，ハードが担当していた社会学の講義の後任として，帝国主義論で著名な J.A. ホブスン John A. Hobson を招聘すべく，4月6日に電話でホブスンに依頼している。[27] 一方，学生も，ホブスンに新しい労働者コレッジの創設に加わって欲しいとかれに接触していた。いわば R.C. 当局と学生と双方でホブスンを奪い合ったのだが，結局 R.C. 側が成功し，ホブスンは社会学を教えることになった。学生側は，本来経済学者であるホブスンに社会学の講義を担当させることの不当性を主張することになる。

4月20日，R.C. で授業が再開されたとき，54名の学生のうち10名は戻らなかった。もちろん新しい労働者コレッジの設立運動を指導した G. シムズも，戻らなかった10名の中に含まれている。そこで R.C. 事務長は一計を案じ，シムズを退学に追い込むべく，かれに奨学金をだしていたソルター博士にそれ以降奨学金を打ち切るよう書簡をだした。その結果糧道を絶たれたシムズは，退学に追いこまれたのである。[28] だが，かれはオックスフォードにとどまり，以後3カ月の間，プレブス・リーグの組織化に専心し，新しいコレッジ設立の推計者になった。その設立のための暫定委員会には，「2人の労働党国会議員が含まれており，また，ウィル・ソーン Will Thorne は財政担当であった。[29]」南ウェールズの炭鉱夫がその設立を支援した。R.C. と訣別し，新たな大学を創る決意は，つぎのように表明されている。

「かれら（R.C. に戻らなかった学生たち）は，ラスキン・コレッジがもはやかれらが活動するに値しないということをいまや認識した。現実に（オックスフォード）大学に従属し，民主主義を助成する基礎的な適合性をもたない教授たちに統治されている。そして労働者階級の思想に公然と敵対している。労働者の援助者としてのラスキン・コレッヂは無価値であることが，かれらには明白である。かれらは全員の投票にかけ，ほとんど全員一致で，『プレブス』は労働組合員にかれら自身のコレッジを援助するよう求める決定をした。[30]」

労働者コレッジを創立するという考えは，プレブス・リーグのカーディフの大会で4月17日，すでに検討されることになっていたが，学生のストライキで，すべての注意をオックスフォードに集

注 (26) *Ibid.*, vol. 1, no. 4, May 1909, p. 71.

(27) *Ibid.*, pp. 77-78.

(28) *Ibid.*, pp. 71-72. ソルター博士は，ロンドン・カウンティ・カウンシルの卓越した独立労働党の活動家であり，バーモンズィで労働組合と社会主義運動に献身していたシムズの才能を高く評価し，2年間かれがR.C.で学ぶための奨学金を与えた。シムズは，1908年1月，R.C.に入学した。かれの学力は抜群で，学生の自主クラスで経済学を教えた。

(29) J.P.M. Millar, *op. cit.*, p. 12.

(30) *The Burning Question of Education*, 1909; quoted in J.P.M. Millar, *ibid.*, p. 10.

中するために一応棚上げにし，1）すべての組合がラスキン・コレッジから資金援助を引き上げること，2）すべての組合はただちにオックスフォードに，労働者コレッジを設立するべく作業に入ること，3）この目的のための宣言をプレブスの南ウェールズ委員会が作成し，労働組合に回すこと，という3点を決議した。[31] 翌4月18日，南ウェールズ委員会は，前日のカーディフ大会の決議にもとづき，南ウェールズ炭鉱夫連盟 South Wales Miners' Federation（以下，S.W.M.F. と略す）の各支部が，つぎのような決議をできるだけ早くだすよう要請することになった。

「当支部はオックスフォードに労働者組織によって民主的にコントロールされる真の労働者コレッジが必要であると確信し，その目的のために一人当り1ペニーを組合員に課すことを呼びかける。[32]」宣言は3,000部刷られ，南ウェールズの労働組合と社会主義団体に配られることも決められた。この労働者が出資する労働コレッジ設立の呼びかけに最初に応えたのが，S.W.M.F. のモンマス・ウエスタン・ヴァリー地区 Monmouth Western Valley District であり，労働者コレッジの原則の承認と組合員一人当り1ペニーの献金を提案した。「ウェスタン・ヴァリー炭鉱夫が歴史を創った！[33]」と『プレブス』が称賛したゆえんである。

S.W.M.F. とならんで新しい労働者コレッジ設立を支援したのは，A.S.R.S. である。（合同機械工組合 Amalgamated Society of Engineers も援助した。[34]）A.S.R.S. の C. ウァトキンス C. Watkins は，R.C. の卒業生であったが，1909年3月21日，シェフィールドの鉄道労働者の集会で，「ラスキン・コレッジの弱点と危険性は，裕福な人々の個人的献金に大きく依存しているからであり，かれらは多くのばあい労働者の解放に反対しているのである[35]」と指摘し，労働組合から資金を集めることにより，コレッジを労働運動のコントロールの下におくことができると主張していた。

さらに，1909年7月16日付の A.S.R.S. の機関誌『レイルウェイ・レヴュー』*Railway Review* は，8月に開かれるプレブス・リーグの創立大会は「歴史的なもの」になることは確実であると評価し，A.S.R.S. も多数の支部が代表を送るとして，つぎのように書いた。「デニス・ハード氏のラスキン・コレッジからの解雇は，労働者団体により支配される労働者コレッジの運動に，ラスキン・ホール（R.C. のこと—引用者）の運営理事会がほとんど予測しなかったほどのはずみを与えた。……我々は読者がその新しい運動の意義を充分認識するよう期待する。労働組合運動の内外で，政治的分野や他の分野において労働者の独立的努力に反対して闘ってきたあらゆる反動的勢力が，独立のコレッジ創設を阻止すべく駆りだされるだろう。A.S.R.S. の執行委員会は今年度の終りまで，現存のコレッジ（R.C. のこと—引用者）に拘束されるが，年次総会でその問題を新しい状況の光に照らして再考することを妨げるものは何もないし，もし新しいコレッジに移ることが適当であると考えるならば，数週間のうちに開校されるといわれている。[36]」A.S.R.S. のような大規模な労働組合が，

注（31）'Labour College in Oxford', in *Plebs Magazine,* vol. 1, no. 4, May 1909, pp. 78-79.
（32）'"The South Wales Wing"', *in ibid.,* p. 79.
（33）'Welsh Miners and the New College', in *ibid.,* vol. 1, no. 6, July 1909, p. 112-20.
（34）J.P.M. Millar, *op. cit.,* p. 12.
（35）'Ruskin College and the Labour Movement' in *ibid.,* vol. 1, no. 4, May 1909, p. 80.

R.C.の学生ストライキに注目し，D.ハードとプレブス・リーグを支持し，新しい労働者コレッジを支援する体勢をとったことが，新コレッジ C.L.C.の設立を可能ならしめたことは，確実である。『レイルウェイ・レヴュー』の副編集長 W. ボール Willet Ball は，とくに熱心に C.L.C.の労働者教育を支持した。[37] 全国新聞が C.L.C.に非友好的であったなかで，『プレブス・マガジン』と共に A.S.R.S.の機関誌が果した意義は大きい。

III セントラル・レイバー・コレッジ（C.L.C.）の設立

1. C.L.C.の開校

1909年8月2日，プレブス・リーグの最初の年次大会が，200名程の労働組合代表や R.C.学生，卒業生の参加の下に開かれ，新しい労働者コレッジ，すなわち C.L.C.の設立が決定された。シムズは総書記報告のなかで，「ラスキン・コレッジと労働運動を結ぶ最後の鎖は切れたことを認識し，多数の学生は組織された労働運動により所有されコントロールされる新しいコレッジを設立する試みの大胆な第一歩を踏みだした」[38] と宣言した。そして，同年9月8日，ハードをコレッジ長（無報酬）とし，オックスフォードのブラドモア通り Bradmore St.の二軒を借り20名の学生を収容して，C.L.C.が開校する。以後，1929年の閉校までの20年間，C.L.C.は，規模は小さかったが，マルクス主義労働組合運動家を輩出する「輝かしい」労働者教育の拠点となる。とりわけ，1910年以降14年までの「労働不安」の時期に，戦闘的な C.L.C.学生，卒業生，支持者が，シンジカリストとして全国鉄道労働者組合 N.U.R.にみられるような産業別組合の結成に果した役割は大きい。それ故，J.P.M.ミラーは，「労働者コレッジ運動」の起点をプレブス・リーグと C.L.C.の設立に求め，「それが1921年の全国労働者コレッジ評議会（N.C.L.C.）の結成に連なっていく」[39] とするのである。

創立宣言は，つぎのような目的を掲げていた。

「　　セントラル・レイバー・コレッジ，オックスフォード　　1909年8月3日

連合王国の労働者たちは，教育はかれらが希求する解放を獲得するための重要な手段の一つであることを理解しはじめている。かれらは他の手段では求めても空しかった自由のための科学に期待している。かれらは科学による自然の征服が少数者の利益のためになされたことを知っているが，しかしいまやかれらもまた科学の助けを求めなければならないことを認識しはじめている。政府の

注（36） *Railway Review*, July 16, 1909.

（37） W. W. Craik, *op. cit.*, p. 90.

（38） *Ibid.*, p. 82.

（39） J. P. M. Millar, *op. cit.*, p. 1. N.C.L.C.は，1964年，T.U.C.がその活動を吸収することになり，幕を閉じた。それ故ミラーは「労働者コレッジ運動」は，1908年から1964年までとしている。なお，J.F. & Winifred Horrabin, *Working-Class Education*, 1924. では，労働者教育史上 1908年～1924年を 'The Proletarians' と特徴づけ，それ以前の 'The Philanthropists, 1848年～1908年' と区別している。

失敗ならびに大衆の貧困は，国民生活の再構成を要求している。

すべての人々にたいする社会科学の教育は，現在の社会組織の下では不可能である。すなわち，労働者の少数の人々だけが提供されている教育施設により利益を得る機会があるとの認識に立って，C.L.C. は，労働組合評議会，労働党，協同組合，および社会主義諸団体のような諸組織に実体化されている産業的，政治的，社会的目標のために，教育面において男女に知識を装備する目的で創設されたと，我々は宣言したい。労働者の分配改善のための大いなる希望は，労働者を開明的市民にすることができ，かくして，人類未踏の社会構造を構築する力をかれらに与えるところの知識のなかにある。

C.L.C. は，社会科学の訓練をするための厳格な教育機関である。C.L.C. は，その目的に含まれるすべての課題に関する思想の最大限自由な表現を支持する。学生たちはまた，文法，論理学，修辞学のような正しい思考と表現の方法も教授されるだろう。

C.L.C. は，人びとに対する新しい民主的な申し出である。その支配は，教育が自由のための偉大な手段であることを認識し，それ故，コレッジに支援や学生を送る労働組合の手中にあることになろう。

我々の社会問題を解決する手段として有効な科学的教育に確信をもつすべての人びとに対し，労働者自身が求める教育形態を提供するこの最新の実験への助力を，我々は求めるものである。

我々は，このことを強い確信をもって実行する。何故ならば，知性の広野がヨーロッパのすべての地域社会で荒廃したままであることが明白だからである。市民権という特権が，市民権の義務や責任について知識をもたない数万人に与えられている。教養ある市民を創造することは C.L.C. の目的であり，この仕事が完遂されれば，我々は時代の最も偉大な思想家たちの壮大な理想を実現するのを助けることになろう。

1909年9月に開校するために，コレッジは資金を緊急に必要としている。家賃はすでに保障されている。[40] 」

では，C.L.C. 発足時の教科内容はどのようなものであったのだろうか。1909年の C.L.C. の『要綱』[41]によると，設置された教科は，社会学，進化論，論理学・修辞学，論文作成，経済学，産業史，社会運動史，政治史・憲政史，政治・社会問題，地方政治の10科目，2年間のコースであった。1学年では，社会学か経済学を選択し，他に最低1科目を履修し，毎月毎に各科目の論文提出が義務づけられた。2学年では，1科目以上より専門化された教科をコレッジ長ハードの認可を得て履修することとされ，毎月少なくとも1科目につき1論文の提出が義務づけられた。なお，『要綱』には，資金が許すようになればただちに，選抜された学生たちが他国を訪問し，その国の労働運動を研究することができるようにすることが望ましい」とあるが，この外国で労働運動を研究す

注 (40) *The Appeal of the Central Labour College, Oxford,* 3 August 1909. (MSS. 127/LC/4/1/2/1) 引用は全文。

(41) *Prospectus of the Central Labour College, Oxford,* 1909. (MSS. 127/LC/4/1/2/1)

る財政的余裕は，その後もできなかった。毎年開講は9月とされ，講義は年間48週にわたったが，「学生はいかなる時でも1カ月以上の期間，在学することができる」とされ，短期在学も認められていた。そして，「1人の料理人以外は従業員がいないので，学生は1日2時間，清掃等をやること」や，既婚者はコレッジ内に居住できないことも規定されていた。コレッジの費用は授業料，寮費を含めて年 £52（1年以下の在学のばあいは，週 £15 s の計算），寮を離れるときは1カ月前の予告が必要，授業料は1カ月前払いとされていた。

財政難のため教員確保は難しく，コレッジ長（Principal の用語が廃され，Warden と呼ばれた）ハードが社会学を，R.C. を解雇された A. ハッキング Alfred Hacking が英語文法と文学を教えた。G. シムズは経済学を，協同組合や労働組合の経験を有する F. チャールズ Fred Charles が工業史と政治史を講じた。以上4名が常勤であった。料理人や用務員を雇用する財政的余裕はなく，トム・ブラウン Tom Brown とチャーリー・ペンドリ Charlie Pendry が数年間「無償で」[(42)]その仕事を行なった。

かくして，1910年頃のイングランドには，R.C., C.L.C., および労働者教育協会—W.E.A. という三つの労働者教育組織が存在していたことになる。W.E.A. は1903年に設立されて以降急速に発展し，支部の数は1906年の13から1914年には179になり，加盟団体も14年には2,500を越える大規模な組織になった。これらの支部は，短期講習会，週末学級，読書会等様々な活動を行なったが，その中心は大学の講師指導講習会で，1908年の前記オックスフォード合同委員会の設立後，バーミンガム，ケムブリッジ，リーズ，リヴァプール，ロンドン，マンチェスターの各大学を中心に急速に拡大した。非党派的教育を主張し，地方自治体の財政支援も受けた。[(43)]著名な歴史家 R.H. トーニー Richard Henry Tawney がテューターとして活躍したのもこの W.E.A. であり，『16世紀における農業問題』*The Agrarian Problem in the Sixteenth Century,* 1912. はこの活動のなかで必要性が痛感され執筆されたものである。

このような W.E.A. の「個人的教養の完成を目的とする」方針に対し，批判を浴びせたのは C.L.C. である。C.L.C. にとっては，W.E.A. の活動は，「いかにその指導者が献身的であっても，労働者階級の運動を発展させるより抑制するものと思われた。」[(44)] C.L.C. は，まず必要なのは政治権力を奪取することであり，その後に教育も含めてすべての要求が実現すると把える，極めてプリミティヴなマルクス主義理解にとどまっていたのである。

2. 労働組合の視点からの C.L.C.

開校した C.L.C. が軌道に乗るか否かは，労働組合や労働団体から財政的援助を得られるか否か

注（42）「無償で」は，W.W. Craik, *op. cit.,* p. 91. による。じっさいには，1912年になってブラウンは料理の賃金引上げを求めている。（*Board Meeting,* Nov. 6, 1912, p. 10, MSS. 127/LC/3/1/3）

（43）B. Simon, *op. cit.,* p. 303–11；訳，p. 369–73. W.E.A. については，John A. Blyth, *English University Education, 1908—1958,* 1983. が詳しい。

（44）B. Simon, *op. cit.,* p. 330；訳，p. 373.

にかかっていた。「富裕な人びと」から財政援助を得ることが自立的労働者教育を不可能にしたとして R.C. を批判し離脱した C.L.C. にとって，他に財源を求めることはできない。一方，労働組合にとっても，従来 R.C. を支援してきた組合のばあいには，その支援を続けるべきか，それとも C.L.C. に転換すべきかの選択を迫られた。事後的にみれば，C.L.C. の財政を支えたのは2大労働組合，すなわち鉄道員組合 A.S.R.S. と南ウェールズの炭鉱組合 S.W.M.F. の諸支部であった。そこで，R.C. の財政支援者であった A.S.R.S. が，C.L.C. 支持へと転換した過程，およびそれがもたらした問題についてみてみよう。これは，いわば労働組合側の視点から，この C.L.C. を照射してみることを意味する。

C.L.C. 創立直後の1909年9月に開かれた A.S.R.S. の執行委員会では，まだ R.C. を支持していた。R.C. のリース・スミスと C.L.C. のクレイクの双方の陳述をきいた執行委員会では，原案と修正案が対立した。原案が，「R.C. から支持をひきあげる充分な根拠はない」とするのに対し，修正案は，R.C. は「我々が過去に信じていたような学校ではないことが判明したので，(A.S.R.S. の) 年次総会でコレッジより我々の支持をひきあげるよう強く奨める」というものであった。採択の結果，修正案を支持するのは3人のみで，圧倒的多数で原案が通り，従来通り R.C. への財政的援助をつづけることが決定した。[45] 注目すべきことは，R.C. の支持は A.S.R.S. のロンドンの本部執行委員会で強かったという点であり，地方は逆であった。ロンドンの本部は比較的温健であり，地方，とりわけブレブス・リーグ支部が強いところは，戦闘的であった。A.S.R.S. の本部の総書記 R. ベルは，リブ＝ラブ派の国会議員としても活躍していたが，R.C. の創立以来運営理事会の一員であり，C.L.C. 創立後も R.C. を支持しつづけた。1901年のタフ・ヴェイル判決以来，A.S.R.S. の内部では，リブ＝ラブ派の R. ベルと労働党（1900年2月成立）を支持する社会主義者との間の対立・抗争が続いていたが，A.S.R.S. が R.C. を離れ C.L.C. を支持するに至ると，R. ベルは複雑な立場に追い込まれ，1910年初め，ついに総書記を辞任せざるをえなくなる（辞任後，商務省の職業紹介部に就任）。[46] その意味で，1909年10月4日から開かれた A.S.R.S. の年次大会（於レスター）は，重要である。先の本部執行委員会での R.C. 支持決定からわずか1カ月程で，C.L.C. 支持へと急速に転換したことを示す大会だからである。

C.L.C. 支持は，トウトン第一（Toton No. 1）支部が提案した。「ラスキン・コレッジで生じた最近の諸変化，とりわけ原則に忠実で労働者に誠実であることにより労働者階級運動の信頼と尊敬を得た前コレッジ長デニス・ハード氏を下ろしたことを本年次総会は遺憾とする。

さらに我々は，コレッジが労働運動の信頼を失わせたと確信して，コレッジからすべて今後の支援を引きあげることを決定する。

注 (45) A.S.R.S., *Proceedings & Reports, 1909, General Secretary's Report for Executive Committee,* Sep. 13-18, 1909, no. 124, p. 124.

(46) R. ベルと A.S.R.S. の一般的なことについては，Philip S. Bagwell, *The Railwaymen, the History of the National Union of Railwaymen,* 1963. や *Dictionary of Labour Biography,* vol. II, eds. by Joyce M. Bellamy & John Saville, 1974, pp. 34-39. を参照されたい。

我々は形成過程にあるレイバー・コレッジを歓迎し，そのコレッジが労働運動のコントロール下にあるという条件で我々の支持を与える決定をする。そして，もしこれらの条件が充たされるならば，現在ラスキン・コレッジの2人分の年間奨学金を与えるよう執行委員会に指示する。[47]」

R.C.からC.L.C.への支援変更の動議は，ハル第三支部，ヒーリー，ロングサイト等9支部からもだされた。総書記R.ベルは，窮地に追いこまれた。(以上はA.S.R.S.大会議事録によるが，以下のR.ベルの項は，議事録には載っておらず，『プレブス』による。R.ベルの監督下にある議事録から削除されていること自体が重要な意味をもっている。)「国会議員リチャード・ベル氏は，長時間の演説をしてラスキン・コレッジを擁護したが，重要な争点は何ひとつ扱われなかったという事実において極立っていた。質問に応えてベルは，組合がかれを（R.C.の評議員として一引用者）選出したことはないのだから，ラスキン・コレッジの評議員会にA.S.R.S.を代表してでているのではないと述べた。[48]」投票結果は，提案賛成44，反対5と圧倒的多数でC.L.C.への転換が決定された。『プレブス』は大会で「その結果は大きな長くつづく称賛をもって迎えられた」と書き，その記事に「教育の独立のための圧倒的勝利」という見出しをつけた。[49] この「敗北」がR.ベルの総書記辞任を決意させたことは，大いにありうることである。

このような過程を経て，A.S.R.S.は11月の年次大会でR.C.からC.L.C.へと支持転換の決定をした。その前後にクレイクの退学事件が生じた。クレイクは，A.S.R.S.がR.C.に送った学生であった。R.C.コレッジ長G.スレイター（Gilbert Slater）が，事件の詳細をA.S.R.S.宛11月5日付書簡で書いており，一方，クレイクも同じくA.S.R.S.宛に11月16日付で長文の書簡を書いている。それらによると，退学の理由は門限の12時までに寮に戻らなかったという単純な規則違反であるが，じっさいは，クレイクがC.L.C.設立に奔走していることに対するR.C.当局の報復にあった。クレイクは書簡の中で，「私はこの学校（R.C.）を離れることを残念に思わない」と述べ，「帰郷する金もすぐにはできないので」止むをえずC.L.C.に申請することを認めて欲しい旨訴えている。11月17日には，C.L.C.のハードからA.S.R.S.宛に，クレイクに「宿を貸した」旨告げる書簡が届いた。これに対しA.S.R.S.は，クレイクおよびかれと行動を共にしていたG.F.T.バレットG.F.T. Barretが R.C.を辞めることを認めた。[50]

さらに，より複雑な移籍問題が生じた。それは，従来R.C.に送っていた在籍中の2名の学生に

注 (47) A.S.R.S. *Proceedings & Reports, 1909, Agenda & Decisions of the Annual General Meeting at Leicester,* Oct. 4-8, 1909, no. 94, p. 27.

(48) *Plebs Magazine,* vol. 1, no. 10, Nov. 1909, p. 222.

(49) *Ibid.*

(50) 'Suspension of Mr. W.W. Craik', in A.S.R.S., *Proceedings & Reports, 1909, General Secretary's Report for Executive Committee,* Dec. 6-11, 1909, pp. 130-32. クレイクがR.C.を辞めることの認め方は，「当執行委員会はラスキン・コレッジ当局がその学院の正当なる規律を維持するための行動に干渉する理由はみいだせない」という提案（no. 115）をエドワーズ（Edwards）以外全員で可決したという方法であり，積極的にR.C.を辞めてC.L.C.に移ることを承認したのではない。このことは，この段階ではまだ，A.S.R.S.がR.C.と訣別していないことを示している。バレットの退学の承認は，no. 116, *ibid.*, p. 132.

どう対処するのかという問題であった。11月の A.S.R.S. の年次大会はキンセラ Kinsella とリチャーズ Richards という2人の学生を C.L.C. に移籍することを決定したが,「一定の条件の下で」という条件が実現されていないとして,すぐには実施されなかった。その結果,ただちに移籍すべきだとする要請がハル第二支部他8支部からだされたが,同年12月の A.S.R.S. 本部執行委員会は,その要請を容れず,「すでに授業料支払い済の期間が終るまで,我々の組合員はラスキン・コレッジにとどまること」[51]を賛成多数で決定した。この問題は,翌10年6月の A.S.R.S. 本部執行委員会でもなお継続して討議され,C.L.C. は現在,暫定委員会 Provisional Committee が運営しているので未だ移籍すべきではない,しかし,1910年8月の C.L.C. の第1回年次総会で暫定委員会ではなく恒常委員会が成立したならば,ただちに2人の学生を C.L.C. に移籍する,と決定した。[52] このように移籍が遅れたのは,その背景に R.C. と C.L.C. の合同の試みが模索され,必ずしも C.L.C. が完全に R.C. から独立しつづけることが確立されていなかったことが指摘できよう。

華々しく C.L.C. の独立を宣言してみたものの未だ財政的支援の保障はなく,できれば R.C. と再び合同したいという意図が C.L.C. 側にはあったことは否定できない。C.L.C. の家主であるセント・ジョーンズ・コレッジ St. John's College が「厳しい不公平なやり方で」立ち退きを要求してきたという事情もあった。[53] C.L.C. の D. ハードから R.C. の A.J. カーライル宛の1910年2月15日付書簡が,両校の合同に関する最初のものである。その書簡で,ハードは C.L.C. の暫定委員会の決定として,「新しい状況が生じ,明らかに目的が同様である2つのコレッジが労働運動を二分し,教育に有害となるかもしれない」[54]ので,合同について話し合いたい旨申し入れた。R.C. はこれに応えて,3月10日双方の代表4名ずつが会うことになった。R.C. からは,D.J. シャクルトン,C.W. ボウアマン,リース・スミス,カーライル,C.L.C. からはバーカー,チャールズ,シムズ,ハードであった。この会議は分岐点だった。もし合同に成功すれば,その後のイギリスの労働者教育は,ひいては労働運動も相当程度異なったものになった可能性がある。討議された点は3点あった。第1は,合同したさいの評議会の民主的構成について,第2は,カリキュラムの性格について,第3は,教員を共同で任命することについてであった。[55] とりわけ第2点のカリキュラムの問題は,R.C. と C.L.C. の教育方針が相違しているだけに難問だった。C.L.C. は,マルクス主義を教えることが労働者教育であるとしたのに対し,R.C. はそれを「ドグマティック」であると批判し,「コレッジ (R.C.) は,労働者を市民的,政治的生活のために,さらに,労働組合や協同組合や他の

注 (51) *Ibid.*, no. 113, pp. 129-30.

(52) A.S.R.S., *Proceedings & Reports, 1910, General Secretary's Report for Executive Committee,* June 20-25, 1910, no. 8, 9, 10, 11, pp. 10-11.

(53) 地主 St. John's College が C.L.C. に立退きを命じたのは,セント・ジョーンズ・コレッジにシドニー・ボール Sidney Ball のような R.C. の積極的支持者が何人かいたからである。(W.W. Craik, *op. cit.*, p. 94-95.)

(54) A letter from Dennis Hird (C.L.C.) to A.J. Carlyle (R.C.), Feb. 25, 1910, in *Plebs Magazine,* vol. II, no. 4, May 1910, p. 74.

(55) *Plebs Magazine,* vol. II, no. 4, May 1910, pp. 75-6.

諸組織に従事するために訓練することを目的としている（ここまでは，C.L.C. と同一である—引用者)。かくして，その機能は経済学，社会学，あるいは他の科目のドグマティックな解釈を教えることではなく，むしろこれらの科目について自分自身で判断できるように学生を訓練することであることが明らかとなるだろう[56]」としていた。これは，ラスキンの学生ストライキ後に，前述したようにプレブス・リーグが労働組合等に支援を求める回状を出したのに対抗して，R.C. の運営理事会が労働組合等に出した書簡の一部であるが，いかに両コレッジの教育方針に隔りがあるかが判るだろう。いずれにせよ，R.C. の側は平等な資格での合同に積極的であったようにはみえない。ボウアマンは，C.L.C. が19人の学生しか在籍していないし，イースターには16人離れるので，合同しても3人の学生を受け入れるだけだと発言したし，リース・スミスに至っては，「ラスキンはこれを現金勘定で考える。そちらの財政状況はどうなっているのか？」ときくありさまで，合同の精神とはほど遠かった[57]。その会合では結局，何の決定もなされなかった。3月15日には，ハードは R.C. が前出の3点についての評議会の正式回答を求める書簡を送り，さらに3月23日付で，つぎのように書いた。

「ラスキン・コレッジへの我々の接近は，労働運動におけるよい教育を行なうために2つのコレッジの間の戦争を停止する真正な試みであった。この精神を貴代表たちに見い出すことはできなかった。……事柄は今や貴殿の掌中にある[58]」

さらにハードの4月6日付の書簡では，R.C. が3月中頃に両コレッジ合同交渉の書簡を A.S.R.S. の執行委員会にみせたことに抗議して，「事柄が何らかの形で公開される以前に，合同鉄道従業員組合 A.S.R.S. の執行部に，2つのコレッジの合同に関する我々の書簡の写しを送付したことは，明白にラスキン・コレッジ側にとって不名誉なことと我々は考える」と書いた。同時にこの書簡では，「ラスキン・コレッジが真に2つのコレッジの合同を望んでいるか否かは，解答されないままである。それに解答がないかぎり，我々はこれ以上何もできない。1週間以内に返答がなければ，貴殿は2つのコレッジを統合する意志がないと我々は結論する[59]」と書いたが，R.C. からの返信は届かず，かくして，R.C. と C.L.C. の合同は成立しなかった。ここで注意すべきは，R.C. が合同のための交渉中の書簡を A.S.R.S. に送付した点であろう。C.L.C. によれば，この送付は「ラスキン・コレッジが合同を志向しているという印象を与えた。その結果，A.S.R.S. の（どちらのコレッジを支持するかの—引用者）決定が6月まで遅れた[60]」ということになる。おそらく A.S.R.S. が

注 (56) A.S.R.S., *Proceedings & Reports, 1909, General Secretary's Report for Executive Committee,* June 14-19, 1909, p. 118. この R.C. が出した回状は，もちろん *Plebs Magazine* には掲載されていない（したがって，クレイクの著書にもでてこない)。A.S.R.S. としては，この段階では R.C. と Plebs と両方の主張を掲載している。まだどちらを支持するかの決定がなされていなかった証拠でもある。

(57) *Plebs Magazine,* vol. II, no. 4, May 1910, p. 76.

(58) A letter from D. Hird to A.J. Carlyle, March 23, 1910, in *ibid.*, p. 77.

(59) A letter from D. Hird to A.J. Carlyle, April 6 1910, in *ibid.*, p. 77.

(60) *Plebs Magazine,* vol. II, no. 4, May 1910, p. 76.

2人の学生を R.C. から C.L.C. に移籍するのをひき延ばしていた真の理由は，この C.L.C. 側の指摘するような事情による公算が大きい。少なくとも，R.C. と C.L.C. の合同交渉が結着するまでは，A.S.R.S. が移籍の決定をしなかったことは確実である。

1910年9月，A.S.R.S. 執行委員会は，C.L.C. 第1回年次総会（同年8月）に出席したハドスンとウィリアムズの報告を受けて，2人の R.C. の学生の移籍を再度検討したが，意見は三分し，結局まだ移籍の条件は満たされていないとの提案を可決した。[61] 同年12月になると，A.S.R.S. は C.L.C. への派遣学生2名を募集することを決めるが，C.L.C. の運営理事の指名を決められないという不安定な状態がつづいた。[62] そこにひとつ面倒な問題が生じた。R.C. にとどまっていた学生キンセラが C.L.C. ではなくて R.C. での在学延長を求めて奨学金を申請したのである。1911年3月の A.S.R.S. の執行委員会では議論百出したが，かれの1年間の延長が，R.C. と C.L.C. の両コレッジの紛糾した状態が，「その対立がなかったならば享受したであろう利益を，キンセラから奪ったのを認める」[63] との理由で許可された（他の1人のケースは不許可）。

1911年6月の執行委員会では，C.L.C. へ £50 寄付することと C.L.C. への2名の派遣学生も決め，受託者決定は保留したが，C.L.C. の運営理事会（常設）の理事にもエドワーズとウィリアムズを決めた。[64] ウィリアムズは，ベルの後任として A.S.R.S. の総書記になった人物である。C.L.C. 支持の流れは，ようやく決定的となった。一方，R.C. は，1912年1月末に予定されるコレッジの新建築の開始式に A.S.R.S. を紹待したが，1911年9月の A.S.R.S. 執行委員会は，「本組合はすでに C.L.C. に加盟しているので，招待は受け入れられない」[65] と全員一致で決定した。

最後に，T.U.C. 等の全国組織の C.L.C. に対する態度に触れておこう。T.U.C. 議会委員会は，R.C. を支持し C.L.C. に敵対的であり，第一次世界大戦まで C.L.C. を正式に承認しなかった。C.L.C. の第2回年次総会（1911年8月7日）は，T.U.C. と G.F.T.U. が R.C. に労働組合員のための奨学金をだし，組合員の教育を行なっていることを報じた『タイムズ』（1911年7月28日）を紹介し，T.U.C. と G.F.T.U. が R.C. のみに奨学金をだしているその「非民主的行動」に抗議する決議をしている。[66] T.U.C. が，C.L.C. を「ラスキン・コレッジと同じく我々の尊重に値する」[67] と認めるに至るのは，1915年まで待たねばならなかった。（続）

（経済学部教授）

注 (61) A.S.R.S., *Proceedings & Reports*, 1910, *General Secretary's Report for Executive Committee*, Sep. 19-24, 1910, no. 10, p. 12. 執行委員会は，1）ただちに2人の学生を移籍すべき，2）C.L.C. の運営理事会が成立したとき移籍すべき，3）現在移籍すべきではない，と意見が三分した。

(62) *Ibid.*, Dec. 5-10, 1910, no. 19, no. 21, p. 13.

(63) *Ibid.*. March 6-11, 1911, no. 9, p. 5.

(64) *Ibid.*, no. 6, no. 7, no. 8, p. 7.

(65) *Ibid.*, Sep. 16-19, 1911, no. 92, p. 130.

(66) *Central Labour College, Oxford, Report of Second Annual General Meeting held August 7 th, 1911*, p 5. (MSS./127/LC/4/1/3)

「1913年には，ラスキン・コレッジを T.U.C. が正式承認するというボウアマン Bowerman の提案は，多数差で否決された。このとき，セクストン Sexton により，C.L.C. に対する激しい批判がなされた。」B. Simon, *op. cit.*, p. 331-2, fn. 2; 訳, p. 504, 注(101)。

(67) W.W. Craik, *op. cit.*, pp. 109-11. B. Simon, *op. cit.*, p. 331.